国土交通大臣賞

（絵画･版画の部　小学生）

愛知県大府市立共長小学校　６年

八田　えみり

国土交通大臣賞

（絵画・版画の部　中学生）

富山県南砺市立福野中学校　２年

橋爪　杏奈

国土交通大臣賞

（ポスターの部　小学生）

宮城県大崎市立敷玉小学校　３年

今野　龍宏

国土交通大臣賞

（ポスターの部　中学生）

滋賀県彦根市立稲枝中学校　３年

清水　伽奈子

国土交通大臣賞
（作文の部　小学生）

題　名　「岩手・宮城内陸地震そのときから」
徳島県　吉野川市立知恵島小学校６年　立石　明

「もうそろそろおりて行くよ。」
「うん、テレビ消しとく。」
そんな会話をしているとき、カーテンが左右にゆれ、グラグラと部屋全体が大きくゆれ出しました。
「お母さん、地震。」
はじめは、小さな地震かと思いましたが、そのゆれはなかなか止まりませんでした。怖くなって、母の近くによって二人で手をにぎっていました。頭の中はぐちゃぐちゃで、
「怖い。これはどういうこと。何が起こっているの。この先どうなるの。これは現実に起こっているのだろうか。」
ということを繰り返し思っていました。そして、部屋が、竹のさおの先に付いているかと思うくらいゆれるので、ポキッといつか折れてしまうのではないかという恐怖を感じました。

母と私は、６月１４日朝、秋田のホテルの１１階にいました。ゆれがおさまってから、テレビを見ると地震の緊急速報が流れていました。ホテルの放送で、エレベーターは停止し、今のゆれは震度５だったことを知りました。ホテルの係の方にゆうどうされ１階におり、秋田駅に向かいました。駅のエレベーター横の天井が一部落下していました。新幹線をはじめ、電車も運行していませんでした。駅の構内では、地震の現状が放映されていました。そのとき、はじめて、とても大きな地震が、岩手・宮城の内陸部を中心に起こったのだということを知りました。テレビで、一関市や、栗原市の山腹崩壊現場が放映されるようになり、その被害が思っていたよりとても大きく大変なものであると感じました。地震が起きたことは、緊急放送で全国に流れており、家族や母の知人、私の友だちのお母さんから安否を問う電話が入りました。だんだんとこの地震は、現実のことなのだと感じられるようになりました。

震源近くの方たちは、私が味わった恐怖よりももっと大きい恐怖を味わったと思います。また、亡くなった方や行方不明の方のこと、その家族の方たちのことを思うと、本当に胸が苦しくなります。

岩手・宮城内陸地震から、１ヶ月余り過ぎました。私は、その後のことが気にかかり、ずっとインターネットで土砂災害情報を見ています。そこで、今回の地震で亡くなった方や行方不明者の方の８割以上が土砂災害であったということを知りました。また、救助活動と共に、６月１７日からは、直轄砂防災害関連緊急工事に着手していることが分かりました。迫川の河道閉塞（天然ダム）には、土石流のワイヤーセンサーをおき、水位の上昇やワイヤー切断情報を流し、警戒をうながしてさらなる被害をくい止めようとしていることも分かりました。

磐井川、迫川沿いの山腹には、人間の力では考えられないような大きな爪あとが残っています。やさしく包んでくれるはずの自然のもう一つの顔がありました。私たちは、そんな自然の中で生きているのです。

岩手県一関市の岡山地区などでは、次期出水で土砂災害のおそれがあるので、砂防えん堤（砂防ダム）を整備するそうです。その砂防えん堤の先には中学校や小学校があります。私は去年、川田川の上流の砂防えん堤を見に行き、その砂防えん堤で土石流をくい止めることができるのかと、ただ感心し、ながめたのを思い出しました。しかし、今は、その砂防えん堤の先には、多くの命がありそれを守るために整備されているんだと強く思うようになりました。

私たちが生きているように、自然も生きているのです。だから、共に生きていくために私たちは、過去の教訓に学ばなければならないと思います。最近は、集中豪雨も多くなったけれど、激しい雨が降りだしたら川から遠ざかり、雨が降り続いているのに川の水位が下がったり、川の水が急に濁りだしたり、山鳴りや木立のさける音がしたら土石流を注意しなくてはなりません。土石流の先頭部分は大きな岩や流木が集まって小山のようだそうです。すさまじい勢いであっという間に全てのものを押し流してしまいます。がけにきれつが入ったり、がけからの水がにごり小石がおちてきて木の根が切れる音がしたら、がけ崩れにけいかいしなくてはなりません。水面や井戸の水がにごったり、地面にひび割れや斜面から水が噴き出したら地すべりに注意するようにということなど、知っているのと知らないのとでは大きく違ってくると思います。突然の災害でも、その後どうするかで被害の大きさも変わってくるのかもしれません。

私は、地震で経験し感じたことを忘れないでしょう。被災された方はなおさらだと思います。だからこそ、この地震の教訓もこれから生かされ、一日も早い復興と人の心のケアを願っています。

国土交通大臣賞
（作文の部　中学生）

題　名　「関心、知識が身を救う」

愛知県　名古屋市立守山西中学校３年　山田 つかさ

今年の夏は恐ろしく暑く、ここ東海地方でも局地的な豪雨に見まわれています。昨日も岐阜で大雨のため、長良川の夏の風物詩「鵜飼い」が中止になりました。こうして梅雨が明け、夏に各地で大雨が降った後に、秋の台風シーズンがやってきます。そして毎年、土石流、がけ崩れ、地すべりなどが発生して、尊い人命や、大切な財産が奪われてしまいます。この作文を書いていたら、母が「４７．７豪雨災害って知ってる？お母さんが９歳の時、父さん（私の祖父）の実家の裏山が崩れて、家が半壊したんだよ。父さんの知人も大勢亡くなり、父さんについて、後片付けに行ったことを今でもはっきり覚えている。」と言った。私はこんな身近に土砂災害の被害者がいたことに驚きました。昭和４７年７月１２日夜半から１３日未明にかけて愛知県西三河地方の山間部を中心に、大規模な土砂崩れ、土石流などが発生しました。梅雨前線による最大時間雨量７７ミリという集中豪雨が原因で、祖父の実家のある小原村では３２名もの尊い人命が奪われ、家屋の倒壊等、甚大な被害を受け、被害総額は当時でも百数十億に達したそうです。その日は留守だったため、祖々母は無事だったそうで、不幸中の幸いでしたが、泥に埋まった卓袱台や、割れてしまったおばあちゃんの御茶碗を見た母は泣きじゃくったそうです。

日本は山間部が多く、土砂災害が発生しやすい地形です。だからこそ、普段からの警戒が大切な命を救うことにつながります。１時間に２０ミリ以上、降り始めから１００ミリを超えた時には、土砂災害の危険性が高まります。気象情報を常に気にして、土砂災害の前ぶれ現象に注意しなければなりません。井戸や川の水が濁ったり、流木が見られたり、おかしな音がしたり、腐った土の臭いがしたり、ひび割れが見られたり、このような前兆を見逃さないことが重要です。また、平素から自分の住んでいる地域がどれくらい危険なところかを把握しておくことも大切です。市町村が公表している防災マップでは土砂災害の危険が高い地域が表示されているので、とても参考になります。

また、避難の仕方にもある程度の知識が必要です。例えば、がけ崩れの土砂はがけの高さの２倍の平地で約２倍の範囲に被害をもたらすそうです。それを考慮すると、より遠くへ避難することが必要です。また、土石流は時速２０キロから４０キロの速さで流れてくるそうです。私が塾に行く時の車の速度が４０キロなので、ものすごく速いスピードです。だからこそ、流れてくる方向に逃げてはあっという間に追いつかれてしまいます。流れる方向の真横に逃げる必要があります。

このように、個人では土砂災害を予防する大規模な工事はできなくても、土砂災害から自分の身を守るために、関心を持ち、知識や情報を得ることは簡単にできます。尊い人命や大切な想い出を一瞬にして奪ってしまう土砂災害を、他人事だとは思わずに常に心にとめておくことが、一番の防災になると思います。たとえ、今、自分が住んでいるところが危険性の全くない地形だとしても、観光地で被害に遭うことも考えられます。「備えあれば憂いなし」この気持ちを常に持ち実行していきたいと思います。

今度の日曜に、家族で小原村を訪ねてみようと思います。会ったことのない祖父（祖父は私が生まれる六年前に亡くなりました。）や、祖々母が暮らしたところを見てみたいし、４７．７豪雨災害の被害者のご冥福を祈り手を合わせてきたいです。そして、同じ悲しみを二度と繰り返さないように約束します。